

国史纂集

第11号
別府大学文学部
日本史研究室
〒874別府市北石垣
電 (0977) 67-0101

蟻地獄と椎の實拾いの唄

後藤 重巳

目次

蟻地獄と椎の實拾いの唄	後藤 重巳	松浦藩における新田開発の事例	出口 康子
十六世紀、豊後におけるキリシタン音楽について	中山 泰弘	大分県九重町慈雲寺跡庚申塔について	高倉 直美
『嶋屋日記』について	茂藤 秀相	群馬県前橋市山王廃寺を訪ねて	清水 勝
		肥後の山部について	森 猛

昔の子供達の遊びは、自然そのものとともにあった。一日の遊びのうち、雨が降れば家の内で、天気の日には家の外で、それぞれその日の天気にあわせて、無駄なく遊び過ごしたものである。彼らには、その体験から得たすばらしい遊びの技術と知識とがあった。

彼らの、雨の日の遊び場は、村のなかの観音様やお地藏様の床・床下などであり、そこにも素晴らしい遊びがあった。床下の乾燥した土の中には、沢山の蟻地獄が棲んでおり、子供達の最も親しい遊び友達となつた。子供達は、この蟻地獄を捕らえるのに、直には穴の底を穿り、無理遣りに蟻地獄を捕らえはしなかった。子供達は、地面に静かに座込み、大きな声で次の様に唄った。

ひどりごっちょ、ひどらにや、
うなめ。
ひどりごっちょ、ひどらにや、
うなめ。

蟻地獄には、非常に多くの方言があるが、大分県の南部地方では、この虫を「ひどりごっちょ」と呼んだ。「ひどる」は、ハツクすること、「ひどる」は、「ごっちょ」とは、「ごっついうし」つまり「牡牛」のことであり、この虫が牛に似ていてしかも後ろに下がれる癖を持っているところから、こうした名前が付けられたのである。

子供達が、二度三度、声を張り上げ唄い唱えると、蟻地獄は不思議にも穴の底で、ごそごそと動くのであつた。すると子供達は、次に細い棒切れの先で虫を穿りだすのである。小さな虫の事であつても、すぐにえ

ぐり出す事をせず、必ず唄を唱える所が大変面白い。実はこの事は子供達の遊びにおける大切な儀式であり、省く事が許されなかつたのである。蟻地獄を手のひらに取り上げると、多い。子供達は、短い木の枝等を持って床に向かい逢って座り、一匹ずつの蟻地獄を取り出し、虫の尻を合わせて、床の上に据える。そして虫の持ち主の子供達は、お互いに大きな声を張り上げて例の唄を、またまた唄い唱えるのである。虫の尻押し相撲で勝つた方の子供が、相手の虫を貰うことになる。

こうして、子供達は、飽きる事無く虫遊びに興じるのである。蟻地獄を「後ずさり」する「牡牛」と考えたり子供達の発想の素晴らしいに驚かざるをえないし、彼らが、いかによく物を観察しているかを知らしめるのである。

さて、観音様やお地藏様の境内には、大木が多く、椎の木も少なからずかつしんかやのみ、くわれんもんな、どんぐり。
この唄の意味は、「かしの實やかの實は食べられるが、どんぐりは食べられない」と云う事らしい。こんな唄を唱えなくとも、また唱えたとしても、しいの實の発見とは関係ないことであるが、子供達は、必ず唱えたものである。いや、唱えなければならなかつたのである。つまりこれも大事な儀式であつたのである。

ところで、この儀式の根底には「笑い」の心理が潜んでいるのではない。蟻地獄の唄では、「雄々しい牡牛」と「女々しい女牛」とを対比

すること、云う通りに動かなければ、お前は、女々しい女牛だぞ、悔しかったら、動いて見ろ」と云う「嘲笑」の原理によって、蟻地獄を動かそうとする知恵が働いている。男と女の差別が生まれた社会の所産であろうが、椎の實拾いの唄においても、椎の實に対する心理作戦が働いているものと考えてよからう。

このような、「笑いの心理」と云う難しい問題はさておくとしても、子供達が虫や木の實と対話が自由に出来たことは、自然そのものの中に生きて居たからに他ならない。そばを向けたのは、一体、虫や木の實か人間か、その内のどちらであったのか。今やお互いの対話はすっかりなくなつてしまつた。考えなければならぬ問題ではあるまいか。

今、自然環境問題がかしましい。しかし、役人や大人たちが、如何に声を大きくしても、優しい子供達の木や草・石や鳥への語らい掛けがなければ、功を奏することはあるまい。まだ自然を最もよく知っているのは子供達であるからである。

歴史上の子供達は、文字に不得手であつたためか記録を残さず、彼らの生きざまは、殆どしられていない。これからの歴史の研究の分野で、最も意を注がなければならぬところであろう。

(文学部教授)

十六世紀、豊後における キリシタン音楽について

中山 泰弘

はじめに

キリシタンとは、ポルトガル語の *Christão* による転訛である。吉利支丹・記利支丹・切利丹等の漢字を宛てている。歴史学上は、ふつう明治以降に伝わつたキリスト教をキリスト教(基督教)とし、それ以前に伝わつたキリスト教をキリシタン(吉利支丹)と区別している。

キリスト教(カトリック)は、一五四九(天文一八)年、耶蘇会士フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸して以来、国内に急速に広がり、その隆盛は一五八七(天正一五)年の伴天連追放令までつづき、短期間とはいへ、日本の文化・芸術・学問・風俗に影響を与えた。キリシタン音楽はこれら「キリシタン文化」の一つとして位置づけられる。

かを主として、その概要を記すことにする。

キリスト教と音楽

日本音楽の分類において十六世紀ごろ来日した宣教師らによって、もたらされたカトリック系キリスト教音楽をキリシタン音楽(切支丹音楽)と称している。キリシタン音楽は日本人が初めて本格的に接した西洋音楽であり、その反応や受容のしかた及び禁教令による弾圧後の伝承は、日本音楽史上、特異な諸問題を提起するものである。しかし、国内外史料の広汎な検討、且つ、研究上の特殊性もあり未解明の点が多い。

本稿では、東インド巡察師アレックス・サンドロ・ヴァリニャーノ^{註一}によつて設けられた豊後・上(畿内周辺)・下(豊後以外の九州)の三布教区^{註二}の一つである豊後区を中心地たる府内におけるキリシタン音楽の実態、及びいかなる音楽教育がなされていた

キリスト教は音楽的要素を極めて重視する宗教といえる。仏教や古代ギリシアの宗教は、偶像を崇拜する。即ち、可視的要素が非常に強かつた。これに対してキリスト教は可視的な要素を極力排し、神の啓示を耳で「聴く」という傾向が見受けられる。即ち、*"In the beginning was the word."* (ヨハネによる福音書第一章一節)の通り、神は言葉によつて語り、人間はその言葉をもつて神に接する。従つて、神の啓示は耳から伝えられるため、聴覚的要素を持つ音楽が重要な機能を果たし、各種の祈り・朗唱・賛美のため、重要視されたのである。特にイエズス会では、布教活動上、効果的手段として典礼を荘厳にして、信者や一般の人々を感動させるため、多様な音楽を導入する傾向があつた。